

## 「俳ソサエティ句集～山葵～」まえがきにかえて

黒柳双掌・斎藤修風・毛里井静の三名を発起人とする「ハーフ・シリアルスな『俳ソサエティ』へのお誘い」というファックス(！)文書が発出されたのは、一九九四年六月四日のことであった。同案内状には、俳ソサエティ発足の趣旨として「平素、研究・教育に、あるいは業務・家事に心身を酷使して、ひたすらお忙しくお過ごしの諸兄姉と、時に俗世界を脱し、侘びと寂びとに彩られた言葉の世界に魂を遊ばせる機会をともにしたい」というところにあります」としている。ハーフ・シリアルスとしているのは、「もちろん「ハーフ・ジョーキング」という意味で、気取らず・形式ばらず・理屈をこねずという【三不主義】を基本精神としている」とも説明している。

この文書は、当面の具体的行事として

- ①年四回(春・夏・秋・冬に各一回)程度の投句形式の句会開催、
- ②年二回(夏休みと春休みに各一回)程度の吟行(当面は日帰り)の実施、そして出来れば、不定期の句会報『山葵』の配布の三つをあげている。

のことから明瞭なごとく、それは到底「結社」と呼びうるようなものではなかつた。正直なところ、この会合は「俳ソサエティの画像掲示板」というネット上の対話の場と、「新春句会」と、ごくまれな「吟行」がすべてという、かなり雑駁な仲間であつた。俳ソサエティの仲間は二つの共通点で結ばれていた。一つはその職域が国際関係論の「研究」分野であったこと、もう一つは「酒好き」という嗜好である。

こうした趣旨に賛同して入会の意思を示されたのは、次の一一名の



諸兄姉であった。なお、お名前の後の句は、句会参加への「決意表明代わり」としてお願ひしたものである。

安部公子(きみ女)

稻葉千晴(鳴呼晴)

縁台で待つたといえぬへぼ将棋

岩橋信枝(伸恵)

小田英郎(霧岳)

加茂雄三(董山)

甲府路を急ぐ車の暑さかな

黒柳米司(双掌)

ひるがほの性にはあれど炎天下

斎藤修(修風)

櫻川明巧(明陽)

佐藤榮一(東峰、のち秀峰)

毛里和子(井静)

吟行や買ひそびれたる花菖蒲

山極晃(栗毬)

早や母の四十七回忌栗の花

下記の写真は、一九九四年一一月一九日、記念すべき第一回句会が東京千代田区の「割烹(！)味館」で開催された際の集合写真である。



「俳ソサエティ」第1回句会  
1994-11-19 千代田区「割烹・味館」にて

かようには弱な基盤の上に設立された俳ソサエティがその後、三十年にもわたり存続できたのは、毛里興三郎(荒人)・和子(井静)ご夫妻が、ご自邸前に亭々たる櫻林があるところから——遠藤周作の「狐狸庵」になぞらえ——「櫻里庵」という庵号をつけて句会の場としてご提供くださったことに負うところ大である。

井静さんは現代中国研究の第一人者であり、二〇一一年「文化功労者」として顕彰された。二〇一七年の講書始の儀では、皇居松の間で天皇(現上皇)ご夫妻に日中関係についてご進講もされた大家である。

### 学の粹講書初めや淑氣満つ

双掌

ご夫君荒人さんは、定年後一念発起され東京外大でアラビア語の習得に挑まれた由。その俳号は、かの魔法のランプを駆使するアラジンに因むとお伺いしている。

もう一つ、わが俳ソサエティが飲み会と混然一体をなしてきたことに関し、遠路石和からこれを盛り上げる鍋の具材(大量の野菜)、自家製ワイン(赤白各一升)をご提供いただいた笠原十九司(申山)・陽子(輪院)ご夫妻にも謝意をもって言及せねばなるまい。そもそも、葡萄園を取り仕切るなどという作業は輪院さんだからこそ可能なものの、軟弱なわれらには及びもつかぬ世界で、さればこそ、ひたすら感謝の意をもつて痛飲・痛食(という単語があつたつけ?)するばかりであつた。

ご夫君申山さんは中国近現代史家で、南京事件にご造詣が深い革新派の研究者である。余りとは感じなくなるもの」だそうな。とはい、氏は地元で短歌サークルにも参加して研鑽を積んでおられるし、先年、第一句集『立葵』(本阿弥書店、二〇一八年)を刊行されてもいる。いわば本格的な歌人にして俳人なのである。

わが句会として忘れ難いこととして、仲間の三名もが【アルコール依存症】とその延長線上で、天寿を全うすることなく早逝されたという悲劇をあげておかねばならない。

お一人は「日本国際問題研究所」の同僚でもあった秋田のご出身で軍備管理軍縮問題専門家の佐藤榮一(東峰のち秀峰)さん。次いで、山形出身で出版課を担つておられた斎藤修(修風)さん。最後に、長野県出身で、ASEAN研究者の玉木一徳(泰山)さんである。

### 俳句という点では、斎藤修風さんが一段高みに立つており、とりわけ

茶屋忙し天橋立走り梅雨修風

わが村に誇るものなし蟬時雨同

の二句は深くわれらの記憶に残っている。

他方、人間的にもっとも印象が強烈であったのは佐藤秀峰さんであった。かれの人となりについては、所属した「日本国際政治学会」の同僚諸兄姉にもその酒豪ぶりで名を馳せていた。かれが急逝されたのは二〇〇一年三月一五日のことであつた。

### 群れ飽きて一羽離る、寒雀

双掌

秀峰さん逝去から一ヶ月後の四月一四日には、かれがこよなく愛していた武蔵野・平林寺で追悼句会を催した。この句会での高得点句は以下の三句であつた。

花筏漕いで彼岸に着けるやら 鳴呼晴

花に酔ひ醉ふて人恋ふ師ありき

双掌

俺ここぞ若葉ゆすりぬ平林寺 輪院

最後に玉木泰山さんは、悲しむべき事に、ご家庭のフワを口実に酒浸りとなつた恨みがあり、天寿を全うし得ず早逝されたのである。

鍋の座の一人欠けたる広さかな 双掌

われらの句会では、毎回参加者の五千による得点で「天・地・人」の三賞を選んできた。以下には一九九四年の第一回句会以降の全句会と各回の最高得点句のみを示しておこう。

- 一、一九九四年一月（麹町・割烹「味館」）  
佐藤東峰（のち、秀峰）長雨に訪う人もなく萩の花
- 二、一九九五年八月五日（檸里庵）  
黒柳双掌 悪たれがぐるともたげし初氷
- 三、一九九六年一月二七日（平川会館）  
黒柳双掌 みちのくの無人の駅の蟬時雨
- 四、同年九月二八日  
齊藤修風 コスモスの咲き放題の過疎の家
- 五、一九九八年七月一一～一二日（一碧湖吟行「稜光俱楽部」）  
櫻川明陽 紫陽花の押し花ありし古日記
- 六、一九九九年二月二〇日（檸里庵）  
黒柳双掌 なつかしや母かなくぎの夏見舞い
- 七、同年一二月一八日（檸里庵）  
玉木泰山 かまくらの白きぬくもり燭に搖れ
- 八、二〇〇〇年八月二日（檸里庵）  
黒柳双掌 打ち水に老舗暖簾の藍牙えて
- 九、同年一一月二五～二六日（下呂温泉吟行「パストール下呂」）  
稻葉鳴呼晴 薄紅葉地蔵尊の頬染めて
- 一〇、二〇〇一年一月一六日（檸里庵）  
黒柳双掌 父金寿頑固一徹味噌雜煮
- 一一、二〇〇二年一月五日（品川吟行「船宿・平井」）  
黒柳双掌 棲み分けて海鶴ばかりや凍て干潟
- 一二、同年四月一四日（平林寺「むさし野」）＝東峰さん追悼  
稻葉鳴呼晴 花筏漕いで彼岸に着けるやら
- 一三、同年九月一五～一六日（別所温泉吟行「玉屋旅館」）  
玉木泰山 画学生戦に散りぬ秋古刹
- 一四、二〇〇三年一月二五日（新春ネット句会）  
笠原山猿（のち、申山） 無言館妻を描きて逝きし秋
- 一五、同年三月二九～三〇日（石和温泉吟行「糸柳」）  
佐々瞬河 採用の二字なぞりおり春隣
- 一六、同年五月一〇日（第二回ネット句会）  
櫻川明陽 色も香も昼にまさりて梅月夜
- 一七、同年一〇月一一～一二日（湯檜曽温泉吟行「もちや旅館」）  
櫻川明陽 登るほど色めかしけり山紅葉
- 一八、二〇〇四年一月一一日（檸里庵）  
笠原輪院 鏡餅ふつと笑みする道祖神
- 一九、同年三月二七～二八日（真鶴吟行「味豊」）  
黒柳双掌 遠霞けふの宿りはあの辺り
- 二〇、同年一〇月二三～二四日（湯野浜温泉吟行「潮音閣」）  
毛里井静 庄内に台風一過捨案山子
- 二一、二〇〇五年一月八日（檸里庵）  
嵯峨紫文 月白く風唸り上ぐ出羽の浜
- 二二、二〇〇五年一月八日（檸里庵）  
宮本賽亭 雜煮食う孫の危つき箸使い

二二一、同年三月二六日（「浅草吟行・屋形船「野田屋」）

黒柳双掌 うらゝかや江戸裏店の眠り猫

二三一、同年一〇月一五日（裂石温泉吟行「雲峰荘」）

嵯峨紫文 秋草の彼方は富士か峠道

同 同 毛里荒人 ひからびし虫の聲を雨送る

毛里荒人 虫の音や夜陰の底に命あり

二四、二〇〇六年一月九日（檸里庵）＝新春句会

黒柳双掌 寒月に兔を見しはいつのこと

二五、同年三月三一～四月一日（喜連川吟行）

毛里井静 古桜にいにしえ人の声聞かむ

二六、二〇〇七年一月八日（檸里庵）＝新春句会

毛里荒人 行き過ぎて床れば冬の桜かな

二七、同年四月二八日（武蔵野吟行）

毛里井静 国を分く寺廟を越えて黄蝶かな

二八、同年一一月一七～一八日（石和吟行「日の出温泉」）

佐々瞬河（改め、みほ女） 子を膝に蜜柑むく日の遠かりき

二九、二〇〇八年一月六日（檸里庵）＝新春句会

毛里井静 歳めぐり獅子舞の子の逞しく

三〇、二〇〇九年一月一二日（檸里庵）＝新春句会

宮本賽亭 正座する母の背丸し福寿草

三一、二〇一〇年一月九日（檸里庵）＝新春句会

黒柳双掌 膝の子にまた吹いてやる薺粥

三二、二〇一一年一月八日（檸里庵）＝新春句会

笠原申山 木枯の掃き清めたる星の天

三三、同年一〇月一日（石和吟行「君佳」）

毛里井静 百体の仏の笑みや乱れ萩

三四、二〇一二年一月七日（檸里庵）＝新春句会

毛里荒人 家々の歴史をつなぐ雑煮かな

三五、二〇一三年一月五日（檸里庵）＝新春句会

小田川若水 初場所や棧敷を彩る艶姿

三六、二〇一四年一月一三日（檸里庵）＝新春句会

黒柳双掌 母見舞ふ遠き家路や初景色

三七、二〇一五年一月一二日（檸里庵）＝新春句会

櫻川明陽 一瞬の切つ先あがり寒稽古

三八、同年七月九日（金沢「すみよしや旅館」）

櫻川明陽 加賀言葉これも一品夏座敷

三九、二〇一六年一月九日（檸里庵）＝新春句会

小田川若水 淑氣満つ神話の島に波静か

黒柳双掌 荒行に裸形奔めく淑氣かな

四〇、二〇一七年一月一七日（檸里庵）＝新春句会

毛里井静 初硯喜寿を迎へて夢と書く

四一、二〇一八年一月二一日（檸里庵）＝新春句会

櫻川明陽 すずやかな赤子のまなこ福だるま

四二、二〇一九年一月一四日（檸里庵）＝新春句会

稻葉鳴呼晴 菜園の四温のバケツ薄氷

櫻川明陽 指呼の間四島も三寒四温かな

四三、二〇二〇年一月六日（檸里庵）＝新春句会

佐々みほ女 初春やただ居ることの有難し

俳ソサエティについて最後に特記すべきは、「新型コロナ・ウイルス感  
症」（C O V I D 1 9）のこと。二〇二〇年早春に「ダイアモンド・プリ  
ンセス」という豪華クルーズ船の乗員乗客が集団感染（いわゆる「クラ  
スター」化）したあたりを発端とするC O V I D 1 9禍は、三つの波を  
形成しつつ、三十万余の感染者を生み、政府・国民を前代未聞の苦境に  
陥れた。政府は、二度にわたって「緊急事態宣言」（いわば戒厳令）を発  
し、飲食店の営業自粛、国民の外出自粛を求め、懸命に感染拡大の抑制  
を図った。企業や学校ではインターネットを利用した「テレ・ワーク」  
や「遠隔授業」が推奨された。かくして、わが俳ソサエティでも一九九  
〇年代央より吉例となってきた「新春句会」の開催を自粛せざるを得な  
かつた。

ZOOM句会（その後、S k y p e句会）は、その後三年の定型となつた。  
それぞれの最高得点句は、以下の通り。

二〇二一年新春

はけの道ゆるゆる辺る木の芽時 荒人

同年夏季

北斎のやがて画となる青田かな 明陽

同年秋季

収穫の葡萄畑へ御礼肥 申山

二〇二二年新春

病窓に上がる歓声初日の出 荒人

同年春季

人たれも秘めしこともつ臘月 申山

同年夏季

生きてゐる独り爪切る半夏生 申山

同年秋季

色恋の欠片も失せてただ秋思 双掌

二〇二三年新春

蟄居はや三年旅は双六で 荒人

同年春季

春雷や異国のいくさの音に似て 井静 みほ女

同年夏季

手花火や笑顔の先の深き闇 みほ女

同年秋季（井の頭吟行）

湧水に黄葉ひとつら舟となる 明陽

二〇二四年新春

みほ女さんが  
読まぬまま棺へ夫の古日記 みほ女  
で、天3票、選2票の計11点を獲得した。さらにみほ女さんは  
来し方はつづら折りなる老いの春 （4票）  
コロナ禍に逝く人あまた冬銀河 （3票）  
を獲得して、ぶつちぎりの最多得点者となつた。

若潮を汲める能登の海還らざる 申山  
毎日蕎麦よそひ肩の荷おろしけり みほ女

最後に、当初会員に名を連ねられたが、その後、あれこれの理由で句会から足が遠ざかつていった諸兄姉についても言及しておきたい。

山極晃（栗毬）中国近現代史家（故人）

花も見ず酒杯も干さず友逆けり

中村平治（空桶）インド政治研究者（故人）

初春やガンガーの水清からず

加茂雄三（董山）ラテンアメリカ史学者（故人）

歴史あり四条河原の枯れすすき

小田英郎（霧岳）アフリカ研究者

ザンベジの芒穂ゆれて象の影

宮本武夫（賽亭）参議院事務局調査員

すすき葉を飛ばし競ひし日を想ふ

山本武彦（山彦）早稲田大学名誉教授

初めての出会いも和む花火の輪

志鳥學修（鹿山）武藏工大教授

涼しきを花火に映し妻の顔

嵯峨隆（紫文）静岡県立大学名誉教授

戾りたる賀状無沙汰を責むがごと

小田川興（若水）朝日新聞論説委員

還暦の年酒温め独り坐す

このように、旧知の間柄で多士済々なメンバによる句会で、和気藹々として笑顔が絶えない場でありながら、相互批判となると歯に衣着せぬ丁々発止・侃々諤々たる論議が展開されてきたのは自然の流れであった。

席亭ともいえる荒人・井静のご夫妻は、本句会の最長老で、「老成した感」のある句をものされるが、ご夫妻の間に相通ずるものがあるのか、何らかのテレパシーの働きか、選句において相互の句を取られることも少なくなかった。

次いで申山・輪院のお二方には、日常生活上の齟齬のようなものが覗える掛け合いを聞かせていただいたが、輪院さんの献身的な葡萄園経営への感謝の念が申山さんの出句に余すところなく表され、両者のギャップが多くの夕の笑いを誘ってきた。

頑健な体躯の持ち主の明陽さんは——参議院事務局調査員というご経歴を反映してか——内外時事を描いた句も多いが、季語の世界にもご造詣が深く、キラリと光る句をものされてきた。

みほ女さんは、ご恒例のお母上・伯母上の介護に励まれていると聞くが、出句にもしばしば母上が登場される。自然体でフェミニンな香りある句を詠まれる。

きみ女さんは、旅行・寄席・くずし字など多趣味な女性でありながら、その句は気つぶの良い、いなせで「竹を割ったような」雰囲気を感じさせる。鳴呼晴さんは、句会でただ一人の現役（名城大学教授）で、海外調査のため頻繁に世界を駆け回つておられ、句会への出席は残念ながら少なめである。最後に古川恵寿さん。リモート句会にはご参加されなかつたが、吟行ではうちも賑やかに場を明るくしてくださる貴重な存在である。

末尾ながら、本句会が会員諸兄姉にとつて貴重な憩いの場であり、実り多

い癒やしの場として長く記憶に残るよう祈念して「ハイソサエティ句集／山葵」のまえがきとしたい。ちなみに、句集のタイトルを「山葵」としたのは、わが句会が侘び・寂びの感興に満ちたものであれとの願いを込めたものである。

### 【双掌記す】

## 交遊抄

1965年

巧氏（金沢工業大）、稻

葉千晴氏（名城大）、安

省舉下の日本  
倍公子氏（邦樂社）など

国際問題研究  
所で研究員を  
所で研究員を  
の俳号で参加している。

70年に細身の  
青年が入所してこられ

た。以来40年以上親しく

お付き合いいただきてい  
る黒柳米司氏だ。

していた。恒例の新春句会は拙宅  
で鍋をつつきながら開

く。遠藤周作氏の狐狸庵  
にならつて櫻里庵と僭称

多士済々だ。夫も「荒人」  
の俳号で参加している。

70年に細身の  
青年が入所してこられ

た。以来40年以上親しく  
お付き合いいただきてい  
る黒柳米司氏だ。

## 俳句の師匠

毛里 和子

は作句、賞の選定  
後の講評だ。師匠  
の評言を聞き、そ  
れぞが思う存分  
自句以外の欠点を  
指摘し、激論後に  
大笑いする。

A S E A N 研究の  
第一人者で、かつ  
ては副学長として  
大東文化大学を率  
いてこられた。そ  
んな先生を普段は  
双掌師匠とお呼び  
する。

94年、彼を中心  
に十数人の俳句  
結社、「俳ソサエティ  
山葵の会」を作った。以  
来、双掌師匠に導かれて  
年2回の句会を楽しんで  
きた。総じて句は上達せ  
ず、師匠には申し訳ない  
が。

村に誇るものなし  
残っている「この  
蟬時雨」(故・斎藤修風  
作)、「ふりかえりむらか  
えりする紅葉かな」(毛  
里荒人作)。もちろん双掌  
師匠の名句「道問へば辛  
夷の辻を右へとぞ」など  
である。(もうり・かず  
同人は笠原十九司氏  
(都留文科大)、櫻川明授  
(二早稲田大学名譽教



黑柳双掌句集

## 【春】

旅立ちの初志固かれと春寒し

早稲田大学ゼミの卒業生を送るに際して。

花に醉ひ醉へば人恋ふ師でありき

思いもかけぬ佐藤東峰さんの急逝を悼む。

遠霞けふの宿りはあの辺り

真鶴吟行で、真鶴半島の遠景を臨む。

春炬燵女房殿の鼻眼鏡

当方は藤澤周平を読み、女房殿は編み物。

荒れ寺の傾ぐ甍や風光る

石和吟行での即興。

かねて聞く常春幕ふ旅出とや

娘の義父の逝去を悼み、義母に謹呈。

うらゝかやこともなげなる癌告知

獨協医大病院の医師「転移性肺がんですね」とあつけらかん。

惜しきまで百花咲き次ぐ四月かな

初めて「朝日俳壇」で入選（稻畠汀子選）。



【夏】

今年また花ある旅の立夏かな

ひたち海浜公園はお気に入りの場所。

七夕や孫の短冊さかさ文字

その孫たちもいまや高校生。

茶野街の堀は紅殻夏燕

金沢吟行でひがし茶屋街を散策。

球児らの汗泥涙清々し

甲子園での熱戦はいつも感動的。

打ち水に老舗暖簾の藍冴えて

一人旅で妻籠・馬籠街道をぶらついた。

愚直なれ母の諭しや立葵

亡きお袋様の口癖「真面目にやりなよね」。

梅雨晴れ間露地に繰り出すもへじかな

子どもらが地面いっぱいにチョークで落書き。

色恋を忘れて久し冷や奴

文字通りの実感。



## 【秋】

露地ごとに丹精の菊三之町

飛騨高山吟行は露地こそ見所。

食ふて寝るのみの病棟夜長し

腎臓の部分摘出後の入院生活。

蟋蟀に迎へられたる鄙の宿

大菩薩峠吟行の宿は軒が傾いていたが。

小春日や蟻を横目に茶をする

昇仙峡の茶屋の縁台横に蟻の列が。

新蕎麦の幟に惹かれ昼餉かな

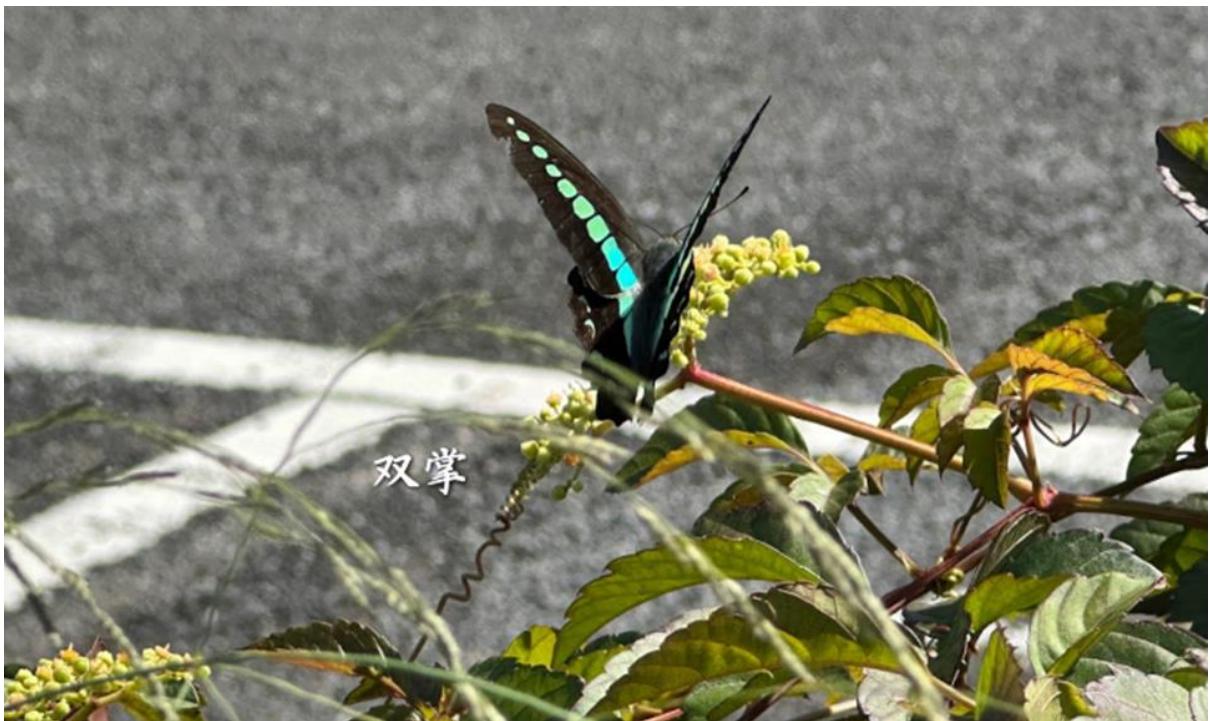
石和吟行での新蕎麦は美味しかつた。

孫呼んで影踏みしたき良夜かな

「良夜」という季語の魅力は格別。

予後の身を踏み出す街の残暑かな

肺結核で一八カ月余の入院を終えて。



## 【冬】

群れ飽きて一羽離るゝ寒雀

思いがけない佐藤秀峰さんの急逝に衝撃を受けて。

己より若きも逝くか冬深し

昨今では、メディアの訃報を見逃せない。

寒月に兎を見しはいつのこと

煌々と冴え渡る月面には餅をつく兎の影がくつきり。

異界への扉軋むや虎落笛

夜来の轟々たる虎落笛の音は不気味で不安にされる。

遠富士の威儀に寄り添ふ寒夕焼け

越谷からも折々見事な影富士が遠望できる。

懐手触るゝあばらも傘寿かな

体重「減」は当方にとつて最大の心配事。

湯たんぽや寝床に書斎居間廁

当方、無類の寒がりにて。

鍋の座の一人欠けたる広さかな

折りにふれて玉木泰山さんを思い出す。



## 【新年】

数へ日や明窓淨机整はず

書斎の整理は年来の課題だが今年も果たせず。

荒行の裸形躊躇めく淑氣かな

年末に多い寒行のＴＶ映像を見て。

初曆まず医通いの丸印

定年退職後、ダイアリーに空欄が増えたが。

三河人頑固一徹味噌雑煮

亡き親父さまが大好きだったなあ…。

聞くのみとなりて久しき除夜の鐘

二昔ほど前には「撞きに」出かけたものだ。

夢問はどう醉ふて半眼寢正月

禁酒禁煙となつたのはいつの頃からか。

屠蘇に飽き茶房に憩う至福かな

スターバックス賛歌。

道すがら唱えて来しか孫の賀詞

孫たちの年始はいつまで続くかなあ。







## 【春】

不世出のヘンなオジサン惜しむ春

コロナ禍の恐ろしさを志村けんの急死が世に知らしめた。

振り向かぬうしろ姿の朧かな

さよならしてから一回くらい振り向いてくれてもいいじゃない。

春の日に残虐非道の性悲し

ロシアのウクライナ侵攻に。

頬寄せて朝寝の父にねだるもの

娘は父におねだりがじょうず。

確執を越ゆるすべなく春炬燵

どうしても許せないことを許すことはできるのか。

絵筆手にあなたの笑顔春の雨

春の雨は身も心も緩めてくれる。



処女作の評判高く鮓食へり

【夏】

次男の漫画『不思議の国のバード』が朝日新聞の書評欄に載つて。

緑陰や子らの駆け寄る水飲み場

子どもたちをよく公園へ連れて行つた夏の情景。

待つ日々に倦みて薄暑の路上飲み

コロナ禍のもと巣ごもりに飽きて路上で酒盛りする若者も。  
緑陰に読書する日の愉悦かな

こんな日が最高。

青葉風すれちがう人きみに似て

街を行くと亡くなつた人にそつくりな人が。

手花火や笑顔の先の深き闇

花火はまわりの闇がどこまでも。

夕まぐれ吾を通りすぎ児を刺す蚊

幼子はおいしそうな血のにおいが?

西日さす読経の伯母の小さき背に

御仏壇にお供えと読経を日々欠かさない。

## 【秋】

梨むけばやや賑わへる老いの卓

初物はうれしいものだ。

疎まれつ地蔵によりそふ死人花

彼岸花は庭に咲くと忌み嫌われた。

こほろぎの絶えし闇夜のしじまかな

コオロギの鳴き声をいつまでも聞いていたかつた。

子ら去り手部屋のかたすみ秋思あり

息子たちが巣立ち、一抹の寂しさ。

この桃のごとく生まれよお腹の児

長男の第三子誕生を控えて。

落ち葉ゆれ人待ち顔の舟つき場

井の頭公園では若かりしころ夫がよくボートを漕いだ。

井の頭いのちの水に黄葉散る

湧き水は神田川となる。

天高し緋鯉真鯉の口や口

池には麁を求めて鯉たちが口をパクパク。





## 【冬】

寒稽古帶結ぶ手に朝日かな

習つていた空手教室では冬の素足の冷たいこと。

寒稽古子らの声音のいや高く

冬の空気には子供たちの掛け声がよく通る。

三寒に静寂の滝四温待つ

滝も凍る嚴冬に。

遠き日の父の姿や冬木立

口数が少なかつた瘦身の父を思う。

山茶花や散り積もる紅そよぐ白

庭にも散歩道にもおびただしい落花。

夢叶ふ夢より覚めし日向ぼこ

ステージで歌う舞姫になる夢は、やはり夢だった。

毎日蕎麦よそひ肩の荷おろしけり

三六五日ご飯を作り続けてまた一年。

寒椿義母と競ひつ落ちにけり

いさぎよく生きた義母は、椿の咲くころ逝去。

## 【新年】

珍客の名をまず記す初暦

久々に合う人の来訪は胸が躍る。

みほ女

人の世のすごろくに似る運不運

人生の何割が運なのか。

地震襲ふ初春の宴をことほぎを

能登の人々も新年を祝っていたさなか、地震が襲つた無残。

老母にはちぎりて入る、雑煮餅

お餅を喉に詰まらせたらたいへん。





安倍きみ女句集

【春】

やめてみた義理のつきあい古稀の春

年を重ねて良いことは、自由な気分になれるのこと。

老叔母の息絶えしごと大昼寝

九三歳のおば。時に昼まで熟睡し、訪問介護師を慌てさせること。

杉花粉くしゃみ鼻水眼に涙

半世紀以上のつきあいの花粉症。

春暁や昨日の怒りおさまらず

勤めていた頃の眠れないほどの怒り。さて何だったか。

侵略を止める術なし春の闇

二〇二二年二月二十四日、ウクライナへのロシア軍事侵攻。

春の雨禁酒似合わぬ人の逝く

佐藤榮一さんの急逝を追悼して。

叶わざる花見の帰国一周忌

台湾の小山綾子さん「桜が見たいから来年帰るね」。

栗穂の遺句しみじみと春の雨

山極晃先生の偲ぶ会で披露された三十五句に感銘。



## 【夏】

炎天を闊歩する我潔し

勤めていたころ自分をホメながら相手先へ歩く、歩く。

すれ違う 羅うすものの襟凜として

夕方の赤坂見附駅ホーム。真夏に凜と涼しげな着付け。

潮の香にきりりとしゃんと藍浴衣

伊東で目にした藍の浴衣を粹に着こなす女性。

梅雨晴れや作陶の手つき褒めらるゝ、

伊東で陶芸体験。ホメ上手の先生「手つきがいいわねえ」。

投げて吼え打ちて笑顔の汗眩し

毎朝のMLB中継、大谷翔平クンにドキドキ、ワクワク。

避暑地とす図書館は椅子あと一つ

酷暑の日は図書館へ。空いてる椅子一つ。ラツキー。

ロスタイル笛非情なり熱帯夜

サッカー日本代表の試合。惜敗にため息。

北の空紅流すごと雷の後

ムンクの「叫び」の夕焼けとそつくりな景色を見て感動。



## 【秋】



刃を入れる、音に林檎の味を聴く

リンゴにナイフを入れた音で、美味しさがわかる。

定食は煙に誘われ初秋刀魚

新橋の定食屋。路地に漂つてくる秋刀魚の煙と匂い。

色えぬ松を背に立つ弁天堂

井の頭吟行。能舞台の松羽目を連想する松と弁天さま。

列島の背骨全山うすもみじ

友人の車で秋田から岩手に横断した時の雄大な景色。

長き夜や明日のことのみ考える

ストレスで出社拒否寸前。とりあえず明日だけ出社しよう。

畑や里熊彷徨いて冬支度

熊も生き延びるために必死です。

急逝に愁思の黙や通夜の席

親しくしていただいた箏曲家が自宅で心筋梗塞。



## 【冬】

大晦日泊まり客来る午前二時

東京ドームのカウントダウンコンサートを楽しんで帰宅。

温泉の宿の塗いわの小椀の晦日そば

大晦日の熱海の宿。「お凌りょうぎ」に朱塗椀の上品な晦日そば。

友帰り晚酌の癖残る寒

数週間滞在した友は帰宅。晩酌の習慣だけはいつまでも。

古稀の子と白寿の母と日向ぼこ

老人ホームの玄関で日光浴しながらのどかなひと時。

日向ぼこ老母の足の爪を切る

足の爪は厚くなつて切りにくく、日溜まりで母は大騒ぎ。

世紀末飛驥はおだやか冬紅葉

二〇世紀末のなつかしい飛驥高山吟行。

コロナ禍の窓開く電車底冷えす

一車両に数人乗車できえも、嚴冬に窓を開放。

【新年】

箱根路を駆けるる子ら待つ二日かな

箱根駅伝の選手を大平台の沿道で声援。

芸者衆に屠蘇を注がれし宿の朝

元旦の伊東。朝食会場で芸者さんが屠蘇のサービス。

呑みて寝て少し飽きたる三日かな

のどかなたのしい三が日。

初場所や騎馬民族の揃い踏み

モンゴル勢のお相撲さんの大活躍。

松過ぎて志の輔を聴く能舞台

銀座の観世能楽堂で志の輔独演会。最前列での至福。

どの髭が福を招くや達磨市

微妙に髭が違う達磨さん、どのお顔を我が家に招くか。

疫病に振り回されて去年今年

コロナ禍の異常な三年間。

元日や次は何処に大地震

阪神・東北・熊本・能登ときたら、次は関東ですか。

